

風光り、其の華、春の霞が如く。

In Paradisum deducant te Angeli

Prologus

三月中旬の空気は春の予兆を孕みつつも未だに寒々しく
蕾すらも実って居ない藤棚からは、どうしても淋しい印象を受けてしまう。
その下で今、あたしは独り佇んで居る。

今日でもう、この場所に来る事も無いだろう。
拍子抜けする程呆気無く、先程、式が終わって
あたしがこの学校で過ごした三年間は
手に持つ安っぽい厚紙一枚に集約されて
明日からあたし達は各々、新しい環境で
また、ばらばらに戦っていかなければいけないのだから。

別に、感傷に浸ろうと言う訳では無いのだ。
だけど、ただ…。

眼瞼を閉じる。
浮かんでくるのは、ある少女の肖像。
彼女は笑っている。
そう、いつだって彼女は笑っているのだ。

これから語るのは、ある出逢いのはなし。
このお話には、都合の良い奇跡なんて何一つ起きない。
機械仕掛けのカミサマなんて出てこない。
臆病で不器用で矮小でか弱い人間達が
それでも必死に笑って
それでも懸命に生きようとした、唯、それだけの記録だ。

「ねえ」

お昼休み、あたしがいつもの様に購買の焼きそばパンに齧り付いていると、近くで声がした。

きっとそれは他の誰かに宛てた物なのだろう、そう思ってあたしは気にせず食事続ける。…この時間にあたしなんか話しかけようと思う奇特な人なんて居る訳がない。

でも。「ねえ、月島さあん、ねえってばあ」

月島…あたしの苗字だ。…予想は見事に外れ。

奇特な人は、どうやら居たみたい。

「……なに？」

…仕方無い。ひとつ、溜息をついて。

ぶん、と音が出そうな突発的かつ機械的な動きで、正確に左後ろ45度に首を回転させ、ジト目を向ける。

…ふわふわな雌が居た。何処か控え目な上目遣いで此方を見つめる女の子。

軽くウェーブのかかった鳶色の髪を肩下位までの二つ結びにして居る。

ブードルみたいだ、それが彼女の第一印象。何故かそう思った。

「……じー…」あたしが半眼で見つめ続けていると、やがて彼女はあたふたし始める。

…そんなにあたしの目つきが怖いのか…。

まあ、彼女の表情がころころ変わる様は何とも面白いから良いのだが。

「じー……」

「はわわあ、どおしよお…」

貴女さっき何度もあたしに呼び掛けておいてどうしようもないでしょうに。

「…用が有るなら早く言って」

視線を外し呟き、林檎果汁のパックを啜る。

視界の端で彼女は未だ暫く慌ててる様だったが、漸く何か決心したのか、小さく両拳を握り「よしっ」と気合を入れて。

「え、えっとね、月島さん、昨日もパンだったよね」未だ少し緊張してる様だったけど。気合の効果は少しは有ったのか幾分ましになっていた。

「…だからなに？」が、話が見えない。

「えっと、学食行ったりとかってしないのかなって…」

「…それが貴女に何か関係が有るのかしら？」冷たく返してみる。

「と、と特に大した事じゃ無いんだけど…えと…御免なさい…」

…彼女の声が段々消えいつている。様子の変なので横目で見ると肩を震わせて俯いていた。

…何て事だ。これではまるであたしが悪者みたいではないか。

罪悪感がつつふつと泡立って心臓をくすぐる。

「…何で謝ってるの」…こんな気持ちになるのは理不尽だと思いつつも少し声を和らげる。

「え…あ…う…何か悪い事聞いちゃったかなって…」俯いたままぼそぼそと答える。

しゅんとしてる様子は。矢張り…雨に濡れた仔犬だ、この娘は。

「…何でそうなるの。ただ…」人が沢山居るのが厭なだけよ。と後半部分はおもおもと口の中だけで呟く。

「怒って、無い…？」潤んだ目。縫り付く様な眼で此方を見上げる。

「…別に」何だろう。…こう言う会話は凄く、苦手だ。

「わたしの事、嫌いになって無い…？」

「……別に…」好き嫌いも何も言葉を交わしたのすら多分今日初めてだと思っただけだ。

「良かったぁ…」途端に破顔。髪を左右で結える、子供っぽい意匠の頭飾りが揺れる。

そして一転、そもそもの用事を思い出したのか真剣そうな声であたしに訴えかける。

「えっと、一昨日ね、月島さんがね、一人でね、購買のパン食べてるの見てね。それで昨日もね、教室で同じものを食べてて、それで今日もね、そうみたいで、えっと…」…やっぱり彼女の話は解かり難い。

「えっとね、やっぱりそう言うのって良くないと思うしね、あ、そうそう、栄養的にもね、だから…」…訂正。それに加えてまどろっこしい。

「…この程度の事でどうにもならないわよ」話を途中で遮る。

「そ、それでも気分的なものとかぁ…えっと…」

「…だからなに」一瞥すると怯えた様に身をすくませる。

…う。

だからどうしてあたしが罪の意識を感じなきゃいけないのだ。

尚もあたふたする彼女に、必死に無表情を装って告げる。

「…そんな事より。貴女の方こそ、食事する時間は大丈夫なのかしら？御昼休みはそんなに長くないわよ」

彼女はあたしの顔と壁にかかる時計を何度かぼうっと見比べて、そしてはっと我に帰って。

「え、え、えええっ、もう殆ど時間無いよおっ」叫んでぱっと身を翻した。

と思うと後ろにあった椅子に蹴躓いて見事にこけた。

べちん。

今更こんなベタなこけ方、こんな効果音漫画でも見ない。

彼女は涙目で額を押さえて、此方を振り返ってあたしを軽く睨む様にしてから、顔を真っ赤にしてふらふらと去って行った。

…今のもあたしのせいなのだろうか…。

やっぱり理不尽だ。

今のでどっと疲れが出た気がする…。

溜息をつきながら、あたしは咀嚼作業の続きに入った。

II

あたしの名前は月島皐月と言う。

よりもよって志望校だった高校の受験当日に熱を出して見事に失敗したあたしが、元々は滑り止めのつもりだったこの女子校に入学してからもう1か月半ばかりが経った。

学生生活と云うモラトリアムにおいて、大事なはその“過程“では無く、最終的にどの様な立場でそれを抜け出すかと言う“結果“だ。

此処で失敗してしまった事は結構なハンディなのは確かだが、別にこれで終わりじゃない。次で取り返せば良いだけだ。

そう決心したあたしはこの学校で大学受験に向けて一心に打ち込もうと思った。

周りの人は、限られた獲物を争う敵だ。

それなのにへらへらしてばかりで向上心の無い人達は唯の愚者だ、そう見下して。

そしてあたしの目論見は成功し、目の色を青春色に変えた周りの人達が、卵の殻よりも薄っぺらいしがらみの確保に奔走する中、あたしは「人付き合いの悪い人」と言う不可触民の称号を手に入れる事が出来た。

元々社交的な方では無かったのも有り、あたしにとってその待遇は中々に快適な物だった。最初はわたしと意思疎通を測ろうと無駄骨を折っていた人も居ただけけれど(主にあたしの近くの席になってしまった可哀相なヒト達)。

彼女達は次々音を上げて、クラス内のカーストが殆ど固定されてしまった今となっては必要事項以外であたしに話しかけて来る人はいない。

さっきのアクシデントに対しては…わたしは別に怒っていたわけじゃ無くて。

ただ…久し振りすぎて。どう扱って良いかよく分からなかったんだ。そうだと、思う。

まァ、先ほどあれだけ邪険にってしまった事だし…多分もう話す事は無いだろうけど。

…そう言えば。彼女の名前すらあたしは知らなかったんだ。ふとそう思い出し、あたしは自分自身への自嘲の意味を込めて、少し嗤った。

III

翌朝。

昨日のあたしの予測は早々と、いともあっさり裏切られる事となった。

…どうも最近あたしは予知能力に翳りが見えてる様だ。

…それともこの子がそう言う物を受け付けない特殊体質なのか。

校門から、3階建ての校舎へ、緩やかに続く登りの並木道。

其の中程で。

「あ、月島さんだぁ。おっはよおだよお」何処か聴き覚えの有る妙に間延びした声。これは…昨日の。

思考が停止。…どうして、彼女が。

「……………」

「あれ。あれれえ？まだ寝惚けてるのかなぁ、大丈夫う??」

「……起きてる」漸くそれだけを返す。

「あは、良かったぁ」彼女が微笑む。

…どうしてあたしなどにまた。まじまじと彼女の顔を見る。

「気持ちの良い朝ですな〜。今日の空は良い事有りそうだねえ」…うきうきと深呼吸を始めた。

「え…えっと…」昨日と違って今日はあたしがどもる番だ。

物言いたげな視線に気づいたのか深呼吸を止めて、彼女は少し首を傾げてあたしをじっと見上げる。

並んで立つと、彼女はあたしの肩位までしか無かった。その状態で見つめあう。

「おはよお」にっこりと笑って彼女。

「…えと」目を逸らす。

「おはよお」回り込んでまたにっこり。

「…う」更に目を逸らす。

「おはよお」回り込んでにっこり。

「…お、おはよう…」…どうしてこのあたしが朝一番からこんなにペエスを乱されなきゃいけないのか。

「うんっ、おっはよおです」我が意を得たり、と言った様子で何度も頷く彼女。妙に嬉しそう。

「じゃ、じゃぁあたしはこれで…」ぎこちなく片手を上げてあたしは早足で歩きだそうと…

くいつ。くいくいつ。

彼女があたしの制服の裾を小さな手で掴んで居た。

「ひゃん…な、な、なによ？」

混乱。思わず情けない声を上げてしまった。…昨日からあたし、何だか振り回されっぱな

しな気がする…。

「え、は、はうっ」

どうやらこれは意識してでは無く、咄嗟に取ったものらしく、見れば彼女も酷く赤面して慌てて居る。

お互い数秒間うろたえる。回復は（あくまでも見た目上は）あたしが早かった。

「まだ、何か、あるの…？」胸が凄いい速さで脈打っている。

彼女は固く目を瞑り顔をぶんぶん縦に振って、それから何度か荒い呼吸を繰り返し、そして何か決心した様にあたしを視た。

「あ、あのねっ、きょ、今日のお昼、一緒にどうかなってっ」

あたしは何度もその言葉を頭の中で反芻して、聞き間違いでない事を確信して反射的に断ろうとして。

…出来なかった。喉元まで押し上がった言葉を外気に触れさせる事が、何故か出来なかった。

其れはもしかして…彼女の言葉に籠められた有無を言わせぬほどの勢いが、彼女の全身から発せられる縋り付く様な必死さが、あたしの声帯を凍らせたのだろうか。

…判らない。

でも…。

「かくん」それはあたしの頸が意思に反して、機械人形の様に垂れた音。

彼女の円らな瞳が二周りばかり更に大きく見開かれて。

少し驚いた様に一、二度瞬いてから大輪の笑みが広がる。

「あ、ありがとおっ、ありがとおっ」紅潮した笑顔で何度も繰り返しお礼を言って。

あたしの両手をぎゅっと握ってぶんぶん振り回し、彼女は跳ねる様な足取りで校舎へ向かった。

途中何度か振りかえってあたしに手を振った。

あたしはと云えば、自分の許容量を超えた事態の進行に、余礼が鳴るまで坂道の途中でずっと硬直していた。

訳も分からぬまま、ただ、胸の動悸だけが激しく打ち続けて居た。

IV

4時限目の終了のチャイムが鳴ると同時に彼女が飛んできた。

授業中色んな考えが頭の中をぐるぐるして、気がついたらお昼だったと言っても良い。

何度か逃げる事も考えてたのだが、そんな隙は完膚無きまでに存在しなかった。

彼女は大きな風呂敷包みと水筒を提げて居る。

「お弁当あるからねえ。お天気も良い事だし、お外行こお」

せめて何か嫌みっぽい事一つでも言おうと思ったのだが、ほへ〜っと相好を崩してる彼女を見てると何も言葉が浮かばず、あたしは借りて来た猫の様に大人しく、彼女の後に続いた。

成り行き上、と言うか流されて居るだけとは言え、初めての経験に、あたしは緊張を覚えて居た。

元々あたしは極度の上がり症だ。

多くの人が居る所だけでは無く、慣れて居ない人の前でもどうしたら良いか分からなくなる。

だから、あたしはそんな時、出来るだけ心の距離を開けた状態にする。

傷つける事も、傷つけられる事も無い安全圏まで。

手負いの獣の様に。

それで、その内皆は興味を失うかして去ってくれる。

だけど、彼女はあたしが下がった分だけ距離を詰めて来るんだ。

害意を感じられない分だけ、あたしはペエスを崩されてしまっただけで。

態度を決めかねたまま、俯いて足を進める。

ロケーションの良い場所を探して、やがてあたし達は中庭まで足を延ばしていた。

あたしにとっては移動教室の時とかに脇を通り過ぎるだけの場所。

まともに立ち入るのは初めてかもしれない。

学舎から離れて居ないはずなのに、何だかクラスのざわめきが遠い波の様で。

「えへへー。えんそくきぶん〜」彼女が能天気な鼻歌を歌いながら生け垣の角を曲がって。

そして不意に立ち止まった。

あたしは足元を見て居たから、“それ”にすぐには気付かなかった。

彼女の背中にぶつかりそうになって慌てて顔を上げて、そして目を奪われた。

天上より垂れる淡い紫と白の雫。離れて見ると霞の様にも見える花の房がふわふわゆらゆらと風に揺れて芳香を運び、透過する淡い光を更に再分化して反射しながら、繊細な花卉は幾つか並べられた古い木の長椅子に、下界に降り積もる。

—それは藤棚。

未だ休み時間になって余り経って居ないからなのか、あたし達の前に先客の姿は見当たらず。

余りにも幻想的な光景とも相まって、本当にこの世界にあたし達二人だけしか居なくなっ
た様な、そんな錯覚に一瞬囚われた。

身近にこんな場所があったなんて、ちっともあたし知らなかった。

軽く、目眩がする。嗚呼。何と言う異世界的美しさなのだ、此の空間は。

「綺麗…」思わず声を漏らしたのはあたしか、彼女か、其れとも両方か。

衝撃を受けて居るのは傍の彼女も同じらしくて。

少し放心気味な様子だったけれど、此方に向き直ると

「うんっ、ここにしましょうよお」彼女はそう云って、藤の色にも負けない位に柔らかな
笑みを浮かべた。

彼女のお弁当もまた、景色同様驚嘆に値する物だった。

風呂敷包みの中身、螺鈿があしらわれた古風な塗りの朱のお弁当箱の蓋を取ると楽園が広がって居た。

中身も器に似て純粋和風。焼き物、揚げ物、煮物、主食、漬物…どれだけの品数が有るのだろうか。

お弁当箱と言う有限の空間の中で全ての料理が幽玄的にして混沌的な、それでいて計算され尽くした美を放っている。

竹の割り箸を受け取り、彼女に勧められるままに、恐る恐る分厚い出汁巻きに箸を伸ばす。…眼前15センチメートルの距離まで彼女が顔を寄せて、眉間に皺を寄せながらあたしの一挙手一投足全てをじっと観察して居て、正直、少しやりづらいのだが。

微かな弾力を持ったそれを、あたしも真剣な面持ちで口へと運ぶ。

慎重に歯を噛み合わせる。化学調味料等では絶対に出せない、深みの有る出汁の馥郁たる薫り、そして陶然とした旨味と甘味が鼻腔から口腔へと拡散し。

…これは…。

あたしが何も言わないせいか、見つめる彼女の表情は、夢見心地のあたしと対照的にどんどん心配そうに曇って行く。

「どどどうしよお…口にあわなかったかな…。砂糖と塩間違っちゃってるのかな…」既に泣きそうになっている。

普通そんな間違いする人は居ないと思うのだが…。

「……美味しい」

「…え？」

「何度も言わせないの。美味しいわ…凄く。」勿論満開の藤棚の下と言うロケーションも関係してるのかも知れないが、これは御世辞では無く、本当に美味しい。

美味しいとしか言えないあたしの貧弱な語彙力が少し恨めしい。

事実、あたしが今まで食べた中でも一、二を争う位の出汁巻きだ。

不安そうな表情から一転、彼女の顔に向日葵の様な大輪の笑顔が咲く。

「良かったぁ…家族以外の人にわたし味見て貰ったの、初めてだったから。凄くどきどきしたよお」

「って…作ったの？これ…全部？」…吃驚した。目の前の少女と、この完成された和風料理の数々が結びつかない、と言っては失礼だが。

「うんっ」元氣いっぱい大きく一つ頷いて。

あたしの吃驚した顔が可笑しいのか、けらけら笑う彼女。

「あ、で、でも大した事じゃないんだよお。これ位」ちょっとはしゃぎ過ぎたのが恥ずかしかったのか、申し訳無きように付け足すが、聞く人によってはこれ、嫌味にしか聞こえないと思うのだ。

あたしが、そんな事無い、凄いと思うって素直に言ったら、彼女は耳まで真っ赤に染めて、照れ隠しの様に早く食べるように急かされた。

VI

食事も終わり（当然の事ながら、他の物もどれもが絶品だった。）あたし達は魔法瓶に入っていた梅昆布茶を啜っていた。

あたしの食べっぷりに褒め言葉がお世辞じゃないって判ったのか、彼女は先程からずっと弛緩した笑顔を浮かべっぱなしである。

食事中、彼女は取り留めも無い事を良く喋った。話題作りが苦手なあたしはこれ幸いと殆ど聞き役に回り、ずっと相槌ばかりを打っていた。

話の量と反比例して、彼女はお弁当の中身をたまにつまむ程度で、あたしが殆ど片づけてしまった。

…あたしは決して大食漢な訳では無いのだけれど。そう言えば、彼女は身長だけでは無く、全体的なサイズが小さい。

制服から覗く手足なんかも吃驚する程細くて。強い風でも吹けば簡単に壊れてしまいそうな。

柔らかそうなふわふわの髪とも合間って、何だかヒトのミニチュア、精巧なドールの様な。

…良く動く彼女の表情で、そんな事は有り得ないって雄弁に否定されるのだけれど。

「…それだけで大丈夫なの？」流石に少な過ぎる、そう思って訊くと、あたしの言葉から懸念を感じ取ったのか、毒なんか入ってないよって少し慌てた。…こんな美味しい毒が有ってたまる物か。

「わたしは普段からこれ位だよお。それに…それに、誰かが美味しそうに食べてくれるのを見るだけで満たされちゃうんだもん。だからね、お腹いっぱい」…そう言う問題では無いと思うが。

「…成程。…だから。こんなにも、発育が」うんうん、と肯いてみせる。

「ちちち違うもんっ。そんな事ないもん。って納得されちゃってるしい…」涙目になって否定する彼女。

それを少しだけれど、可愛いと思ってしまった自分が居た。ぶんぶんかぶりを振って慌てて打ち消す。

…何を考えてるんだ、あたしは。

「…でも、美味しかったわ。…有り難うね」そこで彼女の名前を呼ぼうとして、結局未だ知らなかった事に気付く。言葉に詰まってるあたしを見て察したのか彼女がああ、と頷く。

「うい…姫路羽衣だよお。はごろも、と書いて、ういって読むんだあ」羽衣…彼女にぴったりの名前だな。頭の片隅でぼんやりそんな事を思った。

「…月島。月島臯月よ」

「お月様がニおっ…良い名前だねえ」彼女はそう言ってくれるけれど…。あたしは、何だかその点が自分でもしっくり来ない気がして、余り気に入っていないのだ。

「そうだった。臯月ちゃん、って呼んでも良いかなあ？」

「さつき…ちゃん…」何だろう…。この胸に無性にこみ上げる恥ずかしさは…。

「それでね」未だ続きが有ると言うのか。

「う…うん…」

「わたしの事も、下の名前と呼んでくれないかなぁ？」

「ダメやだ無理拒否ゼツタイ却下」即答する。そんな事、絶対耐えられる気がしない。でも。…でも。

「ダメ…なんだ…」しゅんとして上目遣い。そう言う風に潤んだ瞳であたしの事見つめられたら。

「う〜〜〜〜〜っ」頭を掻き毟る。

しょんぼりしている彼女を見る。名前を呼ぶ呼ばない以前に、あたしはこの雰囲気には耐えられません。既に何度もこんな攻撃を食らっている気がするのに、全く耐性がついた気がしない。うう。これは、反則だ…。

「……羽衣」それは、届くか届かないか位の本当に小さな声だったけれど。

それでも。「皐月、ちゃん」それでも彼女…羽衣はあたしに笑顔を見せてくれた。

「今日はお弁当、あんなに美味しそうに食べてくれて。有り難うだよお、皐月ちゃん」
こう言う場合、お礼を言うのは御馳走になったあたしの方で、あたしも有り難う、って言われるのは少し違うと思うのだが…。

そして…やっぱり、下の名前（しかも「ちゃん」付き）で呼ばれるのは随分むず痒かった。

それでも、彼女の笑顔はそんな恥ずかしささえも包み込んでくれるような気がして。

不思議な気持ちだ。でも、あたしは不快を感じては…居ないと思う、多分。

それに僅かな驚きを感じつつも、何処かで納得している自分が居た。

と、ふとそこで或る事に気が付いた。

「もしかして貴女」

「羽衣」即座に訂正が入る。

「う…羽衣。もしあたしが今朝お誘いを断ったり、お昼居なくなったりしたらどうする心算だったの。あな…羽衣は一人であれだけの量、食べきれないでしょう？」今日の食べっぷりを見ると、自信を持ってそう言い切れる。

すると羽衣は腕組をして唸り始めた。そんなに答えにくい質問だったのかと、あたしが内心焦り始めた頃、羽衣は顔を上げて一つ大きく頷いた。

「わたし、良く分かんないけど。皐月ちゃんなら大丈夫かなって思ったんだあ」

余りにもあっけらかんとした返答に、今度はあたしが絶句する。それでも必死に言葉を探して紡ごうとする。

「ば、莫迦じゃないの。あたしの事何も知らないのに」

「でもでも、実際ちゃんと来てくれたから。だから、有り難うねえ」

それにね、と続けた。

「お互いわからないのは、これから一個ずつでも知りあえば良いと思うんだよお」

…ここまで無邪気なのはどうした事だ。まさに邪気が感じられ無い。

予想外の返答の連続に放心、と言うのを乗り越して呆れて脱力。

それでも一つだけ。そう言えば一つだけどうしても聞かなければいけない事が有る。

「…どうしてあたしなのよ」 そうだ。羽衣みたいな娘が、どうしてあたしなんかにか構うのか。

羽衣はあたしとは違う。もっと大きな人の輪の中で生きていける娘だ。

そんな環境が、ふさわしい娘なんだ。

「…あたしなんて、全日本無愛想大会・高校生の部なんてモノが有ったらほぼ確実に決勝出れる自信あるわよ」

「ぷ。あはははははははっ」…ちょっと冗談めかして言ったとはいえ、あたしの結構真剣な質問に対して爆笑で返されますか貴女は。

「むう…なによ」

「ごめんごめんってあはあはははははっ」…まだ笑ってる。笑い過ぎて涙まで流している。

此方が少しむくれてるのに気付いたのか、漸く羽衣は笑うのを止めてくれた。

「本当ごめんだってえ」両手を拝み合わせる。そこで羽衣は何か思い出したようにはっとして、手首を見た。

「皐月ちゃん…時間」

…え？慌ててあたしも腕時計に目をやる。既に授業始まって時間だった。

しまった…。余りにも話に夢中になり過ぎたせいなのか、それとも中庭と言う立地のせいなのか、二人ともチャイムの音に全く気付かなかったみたい。

「な、な何やってるのよっ。早く行かなきゃっ」すっかり狼狽してるあたし。

それと裏腹に羽衣は「困ったねえ」とか言いつつ、ゆっくりと荷物を纏めてる。

いらいらと足踏みしてるあたしを見上げると「ちょっと、笑い過ぎて脇腹痛くなっちゃったみたいで…。皐月ちゃん、先、行ってて良いよお。」とお腹をさすってみせる。

気の抜けた笑顔で少し舌を出して。

…まったく、この子は。少し呆れて踵を返す。

「楽しかったなあ…」 駆け出した背中に小さく聞こえた。

…結局羽衣が教室に現れたのは、あたしが駆け込んでから15分も後の、授業が既に後半に入ってる事だった。

教師やクラスメイトにぺこぺこ頭を下げながら、羽衣はあたしの方にちらっと顔を向けて小さく手を振った。

あたしは頬杖ついてそっぽを向いて、気付かなかった振りをした。

VII

放課後。

羽衣がすすーっと滑るようにやって来て「この後何か予定有るかなぁ？」と聞いてきた。

「…帰宅」ぼそっと答えたら、「わたしもなんだよお。奇遇だねえ」そう言って微笑むから。

「…じゃ、途中までついて来る？」と、柄にも無い事を言ってしまった。

山の中腹に有るこの高校からおよそ80万ミリメートル。そこに最寄りのバス停留所がある。

あたし達はそこへと向かう下り坂をゆっくりと老夫婦の様に並んで歩いた。

お昼、最後に聞こうとして結局答えを貰えなかった問いをもう一度聞いてみた。

羽衣は一瞬分かんなかったようできょとん、として、数秒たってああ、あれねえってぼんっと手を打った。

そして穏やかに話し始めた。柔らかな風が吹く。羽衣の横顔。心地良さそうに目を細める。

「わたしね。入学式翌日からこの間までほとんど休んでたんだぁ」

「どうして」予想外の言葉に眉をひそめる。

「うーん…風邪をこじらせちゃって」たはは、と笑う。

「風邪をこじらせて…一か月」もう本日何度目か分からぬ脱力。深刻な病気か、それとも入学式で虐められたりしたのではないかとかあれこれ心配して…損した。

…まァ、あたしが勝手に思考を巡らせて暴走しただけなのだけど…。

「それでね、この間出てきたら浦島太郎みたいな気分になっちゃって…。周りの人達は優しくはしてくれるんだけど…何だかお客様の扱いで、皆グループで固まっちゃってるし、話しかけにくいのですよお」笑う。少し困った顔で。

気持ちは分かるけど…。入学直後の数週間でその後の3年間の人間関係って決定されちゃうし。

あたしも、自ら望んでとは言え今現在身をもって体験しているわけだし。

でも。でも、それって…。

「…あたしも一人で居たから。孤独な人同士お似合いだとでも思ったんでしょ？…どうせそんなところだとは思っていたけどね。好き好んでこんなのに話しかける人なんて居ないでしょうし」

でも。「違うの。それも全く無いとは、言えないけれど…違うの」彼女は首を振った。

何処か哀しげな笑顔。達観したような。でも…何に？

「学校に出てきて、当たり障りのない薄っぺらな会話に疲れたの。そしてね、教室を見渡して見つけたんだぁ。皐月ちゃんが何か本読んでて」

…読書はあたしの休憩時間の過ごし方の上位候補だった。いつでも没頭出来るから。この世界から飛び立てるから。

「皐月ちゃんの周りだけね、空気が張り詰めて凜としてて、何だか弓道場とか、朝の神社とか、後何だろ…とにかく皐月ちゃんの周りはどこまでも澄みきってた。わたしからは本

の内容までは見えなかったけれど、自分の世界に深く真剣に没頭してる横顔にね」一息ついて。

「すごく美しいって思っちゃったんだなあ。それから数日あの人に何でも良いから話かけたい、話しかけて欲しい、お近づきになりたいな、あの瞳でわたしの事見て欲しいなあって」

「ずっとそれが頭を離れなくって。皐月ちゃんを遠くから見る度にその思いが強まっていて」羽衣の表情は笑っている。

皐月ちゃんは多分嫌がるだろおなって、それは重々分かっていたんだけど…ごめんねって羽衣が謝る。眉を寄せて、それでも笑顔を作ろうとしながらあたしに謝る。

彼女の言葉には、その場凌ぎ的な取り繕いとかは感じられなかった。

あたしの読書はそんなに高尚なものじゃない。ただ時間を殺してるだけだ。

でも。羽衣の言った事は本当…なんだ。一人だからとかって言う同情でもなれあいでもなくて、誰でも良かったとかって事でもなくて、あたしだから、あたし個人を真剣に見てくれてるんだ。求めてくれてるんだ。

でも、それだとしたら尚更、…あたしは、どう返せば良いんだろう。

彼女の思いが強いものなのだったら、あたしもそれに見合う様にしっかりと返答を考えなければならぬ。

この高校はあくまでも通り過ぎて行く場所。そう思って誰とも接点を求めずにきた。

寧ろ自分から壁を作って周りを遠ざけて居た。

それを乗り越えて、土足で床を蹴散らかして。あたしを散々惑わせてくれたひとがいた。

感情豊かで、献身的で、一見あたしと正反対な少女。でも、あたし達の立ち位置は意外と近かったのかもしれない。

あたしが彼女に何を出来るのかなんて、そんな事分からない。

だけど。あたしも羽衣に対して興味を持ちちゃってるんだ。

だから。

隣を見る。

華奢な身体が緊張に震えながら、それでもあたしを見て精一杯笑ってた。

今日だけでも何度となく見せてくれた笑顔。

羽衣の、笑顔。

またこれから見るのも悪くないかなって、そう思えたから。

口元をちょっと上げて頬を緩めてみる。

あたし今、どんな顔をしてるんだろう。ちゃんと笑顔、出来てるかな。

久し振りだから、ちょっと自信は無いけれど。

「お弁当、美味しかったわ」

「……え？」

「特に竹輪が…磯辺揚げが良かったわ。時間が経ってるのに、歯触りが良くて。薫りも

素晴らしくて。まさに磯辺揚げって感じだった。…また…食べたいな」
目の前の華奢な少女、強張った全身を覆っていた不安と緊張が溶けていく。
本当にそれは雪解けみたいに穏やかで。
上体が揺れる。羽衣がふっと力が抜けたのか、あたしの方にもたれかかってくる。
反射的に抱きとめる形になった。
その身体は、指先にかかる体重は、余りにも軽くて…こんなにも近くに居るのに、この手で確かに支えてるのに、不安になってしまう位。
あたしの胸にこつん、と額がぶつかってそして離れる。香水だろうか？良い薫りが一瞬だけ鼻腔をくすぐる。
「皐月ちゃん…有り難う」小さく呟いて顔を上げ、淡い微笑みを浮かべた羽衣の瞳は少しだけ、赤かった。

VIII

翌日、木曜日。

羽衣はまたお弁当を作って来てくれた。藤棚までまた足を延ばして一緒に食べた。

あたしの言った事を覚えててくれたのか、竹輪の磯辺揚げがちゃんと入ってた。

おかあさん直伝の自信作らしい。良い竹輪を使って、あと、衣の付け方にコツが有るのだ等と言っていた。

手振りで説明されてもあたしには良く分からなかったが、実際美味しかったし、それに色々説明する羽衣はとても嬉しそうだったから、それで良いかなって、あたしは思った。

金曜日。

2時間目の体育の時間、屋内でのバスケを羽衣は見学した。

やっぱり何処か体調悪いのだろうか。

問い詰めたら「ただの風邪だよ。まだ完全に治りきってないみたいだね。お医者さん大袈裟なんだからあ」と、ちょっと困った様な笑顔で答えた。

羽衣のその笑顔を見ると、あたしは胸の何処かがちりちり疼いて、それ以上何も言えなくなる。

いつもそうだ。

仕方無く、あたしは授業に出た。

だけど、羽衣の事がどうしても気になって仕方が無くて。

あたしは体育館のステージの方に何度も目をやっていた。

一人だけ制服のまま、隅っこに体操座りして、ぼおっと皆の動きを目で追ってる羽衣。

何だか淋しそうな、それでいて何処かそんな自分自身さえも遠くから傍観してる様な、何とも言えない表情を浮かべて居た。

それでも、あたしの物言いたげな視線に気がつく度、最上の笑顔を浮かべて、此方に手を振って応えてくれた。

それが何だかたまらなく嬉しくて。

御蔭であたしは試合に全然集中出来ず、結局あたしのチームは負けちゃったらしい。

まあ、そんな瑣末なんて元々興味無いし、あたしにはどうでも良い事なのだけれど。

IX

体育の授業を見学したはずなのに、今日のお弁当もまた豪勢だった。

今日のおかずは中華が中心みたいで、お茶も何だか難しい名前の烏龍茶だったが、それでも羽衣は竹輪の磯辺揚げを入れてくれた。

「体調悪いのに…こんなの作って来て…大丈夫なの？」嘆息交じりに問う。

「だから、お医者さんが心配性なだけなんだってば。それに、明日は何にしようかなって、色々考えるのって楽しいんだよお」

まァ…見たところ、羽衣は特に咳とかはしてないみたいだし、顔色悪かったりとかって事も無さそう。

…普段から白くて判断つきにくいけど。どれだけ屋内に引き籠った生活送ってるのだろうか。

…引き籠もりでは、あたしも大概人の事を言えないな。

「お薬もちゃんと飲んでるし…大丈夫だからァ。皐月ちゃんは心配しすぎい」

「…なら、良いけど…」本人もそう言ってる事だし、小言はこれまでにして渋々引き下がる事にする。

でもやっぱり、彼女は相変わらず小食で、眼前に並ぶお料理には殆ど手をつけようとしなかった。

「でも、ちゃんと食べないと治るものも治らないわよ？」やっぱりもう一つ釘を打っておこう。

何も言わず、ただ苦笑する羽衣。

暫く黙々と食事をしてたあたし達。

だけど。

「あ…」

突然羽衣が声を上げた。

「…どうしたの？」

羽衣は箸の先を咥えて何故か暫く唸っていたけれど、顔を真っ赤にして。

「皐月ちゃんが…あーん、してくれたら少しは食べられるかも…」

春巻きが咽喉に詰まって盛大にむせた。

「ば、ば、莫迦っ。いきなり何、言ってるのよっ」慌てて羽衣が背中をさすってくれる。

鏡なんて見なくても判る。多分あたしの頬も、彼女に負けず赤いのだろう。

衆人環視が無くても、そんな恥ずかしい事なんて…。

勿論「ダ」

「駄目、かなァ…」だからどうしてそんな目であたしを見る…んだ…。

勝手に口が動いた。

「ひ、ひ、ひとくちだけよ？」…あ、あたしは何を言ってるんだ…。

「…うん」そっと目を閉じて、軽く口をすぼめる羽衣。繊細な睫毛が幽かに揺れている。

満開の藤の下で、揺れている。

無防備で…あどけなくて…。何だか…餌を待つ雛鳥みたいで、何て言うか。

不覚にもこれは、可愛い…。

千々に乱れる心を必死に押し殺して、ピックに刺した肉団子を摘み上げる。あたしの指も、少し震えてる。

そっと唇に近付けると…ぱくっ…食いついてくれた。

「ひゃ」思わずちょっとだけ声をあげてしまう。分かっただけ声を出さず、あたしが考えない様に考えない様にしていただけなのだけど、やっぱりこれって…凄く…恥ずかしい…。

ゆっくり咀嚼して味わって嚥下して。

「美味しいねえ」瞳を開け、陶然とした表情であたしを見る羽衣。

頬が未だ赤くて、本当に酔ってるみたいだ。

「そ、そう…なら、良かった、わ、ね」あたしの返答は自然とぎくしゃくしてしまう。

羽衣はそれを見て、不思議そうに首をかしげていたけれど。

やがて素敵な悪戯を思いついた子供の様に目を輝かせて「そうだ。わたしも皐月ちゃんにお返ししてあげましょう～」

「絶っっ対に断るっっ」

「ええ…残念～」

「くっ…」

そうこうしてる間にお弁当も空になり、後は休憩時間が終わるまで暫しのくつろぎの時間。そこであたしはちょっとした計画を打ち明けた。

「…ふと思ったのだけど」

「なあに～？」羽衣はすっかり相好を崩してリラックスモードだ。

「週明けの月曜日…あたしもお弁当、ちょっと作って来ようかな、って…」

「え、え、えええええ？」目を丸くして飛び上がる羽衣。

「…なによ」そこまで驚かれたら、流石に少し、傷つくのだけど…。

「さ、皐月ちゃん…おりよーり出来るのお…？」羽衣は恐る恐ると言った様子。

「あ、あたしだって羽衣程じゃ無いけど出来るわよ。その…一応…」

思わずむっと言い返したあたしの声が、段々威勢が失われて小さくなっていったのには目を瞑って欲しい…。

「わああ…、そうなんだあ…」羽衣の目が爛々と輝き始める。

「楽しみだなあっ、皐月ちゃんのおっ、ラララ手料理い。ラララルルルおいえいっおいえいっチェキナ」終いには妙な節をつけて歌いながら、身体を揺らして踊り始めた。

彼女の動きに合わせて、身体各所から極彩色のオーラが噴き出し、周囲を彩る。

…これ以上は流石に止めなければまずい気がする…。方法は分からないが。

「…そ、そこまで期待、しないでよね…」あたしのこめかみからは止め処無く冷や汗が。

その原因が、約束してしまったお弁当製作への不安なのか、奇怪なライブを目の前でまざまざ見せつけられているからなのか、それは御想像にお任せしよう…。

「にゅふふ〜」漸く一応の沈静化を見てからも、それから一日中、羽衣は傍目に判るほど上機嫌に浮わっていた。

月曜日。決戦の日。

昨日の夜半過ぎから細かい雨が降り続けている。

視界をヴェールのように覆って、世界を白く煙らせる。

あたしは学校方面へ向かうバスの後部座席で、ぼうっと窓の外を眺めて居た。

寝不足の瞼が重い。

膝の上に乗せた学生鞆も、いつもより少しだけ重い。

先週あの子に宣言した通り、その中には二段のお弁当箱が入っている。

それにしても。まさにあれは戦争だった…思い返して少し苦笑する。

実は台所仕事は、たまに母に言われて（嫌々ながら）手を出す程度。

当然お弁当作りなんて人生初めて。

そんなあたしは結局昨日丸一日かけて台所をぐしゃぐしゃに散らかしただけで。

最後には、今日の早朝起き出してきた母を有無も言わさずに動員して。

漸く何とか見られるレベルの物体を作り上げて。

そして登校時間までほんの少しだけ、夢の世界に浸る事が出来たのだ。

勿論、出来上がったお弁当は、羽衣が作って来てくれたものとは比べるべくも無いけれど…。

敗因として、お料理本さえ見れば完璧に作れると言うのがまず誤算であった。

「大匙」って何なのだ。「適量」ってどの位なのだ。「小口切り」とは何だか怖いではないか。

…あたしにとっては異世界言語のオンパレードだった。

流石に楽勝だと思っていたお米を炊く段階でさえも、あたしは炊飯器の使い方が分からず悪戦苦闘してしまった。

取り敢えず自分の勘と目を信じて米と水を入れて、適当にボタンを押してみた。

一度目の挑戦…殆ど生煮えだった。砂利を口の中に入れているような斬新な食感が楽しめた。

二度目…何故か大量のお粥が完成してしまった。今朝の我が家の食卓に上った。

…あたしの勘は、まるっきりあてに為らない事が判った。

どうやら、あたしの料理音痴は、自分の想像を遥かに超えたものであったらしい。…認めたくは無けれど。

あたしが何をしだしたかと驚いたりおろおろしたりしてた家族の顔を思い出すと笑いがこみ上げてくる。

それにしても。「羽衣は、凄いな…」しみじみ呟く。

あたしなんかよりずっと手の込んだものを…羽衣の凄さを改めて思い知らしめた。

大した事無いなんて絶対嘘だ。

それを、あたしなんかの為に、毎日…。

でも、あたしだって今日で終わりじゃないから。

勿論、この程度の出来で満足はしていない。

今のあたしはリベンジに燃えている。

羽衣に「皐月ちゃん、良く頑張ったねえ。美味しいよお」って。

本当に心からの笑顔で褒めて貰える様まで何度でも立ち上がる。

…これは戦いなんだ。

決意を込めて、拳を握り締めた。

と、どうやらバスが着いたらしい。同じ制服を着た連中がぞろぞろ降りて行く。

もう一度気合を入れて、闘気を全身に漲らせて、あたしも席を立った。

バスを降り、傘を差し、通学路の坂道を歩き、昇降口へ。

階段を上り、ドアの前で一呼吸してから、一気に開く。

羽衣はもう、来てるだろうか。お弁当…持って来たって言ったら、どんな反応するだろうか。

見渡す。未だ…みたいだ。

それだけで、軽く落胆。

少し急ぎ足で、自分の席まで誰とも視線を合わせずに歩く。

ドアの音に反応したのか、クラスのヒト達が少し此方を振り返るけれど。

そんなあたしを確認すると興味を失ったように元の行動に戻る。

いつもの事だ。

鞆を置き、頬杖をついて。先程自分が入ってきたドアの方を眺める。

羽衣が来るのが待ち遠しくて。

時間が経つのが、とても長いものに思えた。

始業のチャイムがなるまで、ずっとそうしてた。

結局羽衣は姿を見せないまま、お昼休みになってしまった。

何かあったのだろうか。事件とか、事故とか。

「わたしねえ。入学式翌日からこの間までほとんど休んでたんだあ」

「うーん…風邪をこじらせちゃって」

羽衣の言葉が悪い予感となつてぐるぐる回る。

こんな天気だし、あたしは自分の席で、持ってきたお弁当をぼそぼそ食べた。

久し振りの独りでの昼食。以前慣れ親しんでいたはずの。

やっぱりと言うべきか、あたしのお弁当は余り美味とは言えず。

羽衣の味を再現しようと頑張ってみた竹輪も、湿気にやられたのか、すっかりへたっていた。

これは…逆に羽衣に食べさせなくて、良かったと言うものかも知れないな。

自虐的に考える。

でも、羽衣は明日にはきっと来るから。

そしたら、今日よりずっと上手く作ったお弁当を今度こそ、食べて貰わなきゃ。

自分に言い聞かせる。

だから、前を向くんだ。

何度も言い聞かせる。

だけど、降り続ける雨同様、あたしの心はその日、最後まで晴れる事は無かった。

火曜日。

今日も雨が降っている。天気予報ではこれから数日ずっと続くらしい。

鞆の中で、今日もお弁当箱がその存在を主張している。

今日は何とか、そこまでの醜態を晒す事無く出来た様な気がする。

今日は大丈夫。きっと大丈夫。

羽衣も喜んでくれる。

…きっと。

学校に着く。

でも、目当ての姿は今朝も無くて。

そしてあたしは誰とも会話せずに時間を過ごす。

それは、入学してからずっと続けて居たはずのあたしの日常。

ここ数日間、それがちょっと途切れていただけなんだ。

だから…あたしは慣れてる。…慣れてる、はずなんだ。

そうだ。もしかしたら、あの数日は幻だったのかも知れない。

あの姦しい日々は存在しなかったのかも知れない。

でも、窓際、後ろから二列目の。一つだけぼっかりと空いた席は、そんな希薄な妄想を否定するには充分過ぎるほどの存在感を放っていて。

…慣れてるはずなのに。

こんな事を思い浮かべてしまう位に、どうしてこんなにも、あたしは。

苛々する。

大丈夫、あたしは大丈夫だ。

羽衣もきっと、大丈夫だ。

羽衣…羽衣。

喉元を黒い衝動がこみ上げてくる。

両手で口を塞いで耐える。

大丈夫、だから…。

必死に耐える。耐えようとする。

何とか、今日もお昼休みの時間がやってきた。

独りきりの、お昼休み。

広げたお弁当は、味なんて殆どしなかった。

それでも、あたしはそれを作業的に黙々と、ひたすら口に押し込めた。

時計を見る。まだ休憩時間はたっぷりと残っている。

そう言えば。あたしはこれまでこの時間をどうやって過ごして来たんだっただか。

思い出そうとするけれど、今の空転した脳では何も浮かばなくて。

時計の針は、そんなあたしを嘲るかの様に遅々として進まない。
そうだ。出よう…教室の外へ。
何処でも良いんだ。
ただ、ここを離れられれば。ここの重力は今のあたしには大き過ぎるから。
閉塞感で押し潰されてしまう前に、出よう。
それから、どこを歩いたか覚えていない。あても無くふらふらとしていた。
気がつくと、いつの間にかあたしは中庭の入り口に居た。
雨は当然の様に降り続けている。
傘なんて勿論置いて来たし。靴だって上履きのままだけど。構わずに足を踏み入れる。
あの場所が、羽衣と一緒に消えてしまっていたら…そんな考えが浮かぶ。
それを一刻も早く打ち消したくて、急ぎ足で向かう。
生け垣を曲がると、藤棚は今日もちゃんとその場所に在った。
連日の雨に打たれて、随分花は落ちてしまっていたけれど。
水滴を含んで垂れ下がる花房には、以前にも増して一種妖艶な魅力が有って。
本当に艶やかで、やっぱり堪らなく綺麗だった。
濃密な薫りが沈殿する棚の下へ、あたしは誘われる様に歩み寄り、そして天上を仰ぎ見る。
大粒の雫が、葉っぱ越しとは言え遠慮無しに、あたしの頬を叩く。
もう既にあたしは全身濡れ鼠になっている。
5月下旬の雨は、あたしの体温を奪うには充分過ぎる程に、冷たくて。
指先を伝って、全身の感覚が流れて行く。
でも、そんな事どうでも良い。
この雨が、鬱屈した感情も一緒に、全部根こそぎ洗い出してくれるならば。
雨雨降れ降れ。もっと強く。まだだ。もっと。
弱いあたしを叱り飛ばして。
そしてあたしの代わりに泣いておくれ。
でも。それでも。
「羽衣…」それでも、一度出してしまうと、もう言葉は止まらなくて。
「羽衣…羽衣っ」雨に閉ざされた藤色の世界の真ん中で。
急き立てられるように、あたしは何度も彼女の名前を呼んだ。
…逢いたい。逢いたいよう。
羽衣。

X II

水曜日。

雨は止まない。

今日もあたしはお弁当を作って来ている。

羽衣が来た時、あたしのお弁当を食べて欲しいから。

でも、その一方で。

今日もどうせ、などと。

何処か醒めた目で、物事を客観的に見ている自分も居て。

あたしは…もうどうしたら良いのか、良く分からなくなつて。

それでも、お弁当はあたしと羽衣の一番の接点だから。

羽衣との、残された約束。まだ果たして居ない。

そんな細い糸に必死で縋りつく事が、それが、あたしがバラバラにならない為の唯一の方法だった。

…どうやら、いつも以上に今日は道路が混み合っているみたい。

バスは遅々として進もうとない。

でも、この程度の渋滞なんて良くある事だし、実際あたしも何度も経験しているはずの事。

やっぱり、雨のせいなのだろうか。

昨日はどうだったかな、なんてぼんやり考えたけれど、それは遠い記憶の淵に霞んでしまっているみたいで。

結局思い出せずに、これまでそんな時にいつもやって来た様に、あたしは鞆から文庫本を出して開いた。

でも、あたしの瞳はページを横滑りするだけで。

頭に全く内容が入って来なくて。

多分、文字の羅列を上手く、意味のある言葉として認識出来ないのだ。

暫く格闘してから、諦めて閉じる。

思わずため息が…ひとつ。

また窓の外に視線を向ける。

硝子を隔てた街並みは、先程から殆ど変わって居ない様に思える。

昨日散々感情を爆発させた反動なのか、今日のあたしの心の働きは妙に鈍っている。

外界との間にカーテンでも張られているみたいに。

いや、違う。カーテンでは無い、雲だ。分厚い雲が覆い被さっているのだ。

晴れ間の見えない曇り空。

じっと座っているだけで、焦燥感、諦観、その他色んな感情が澱の様に降り積もっていく。

それは地面に触れると同時に欠落感へと変わり。

やがて、あたしの心を一面の雪原へと変えるのだ。

何も無い、ただまっ白な世界。

そんな所でも、ふとした拍子に強い風が吹き荒れる事が有る。

雪を舞い上げ、吹雪となり、視界を完全に閉ざしてしまう。

吹き荒れる風の音はいつしか声となって。

反響し連動し共鳴し拡大して。

何をしてるんだ。あたしはこんな所で何をしてるんだ、と。四方からあたしを休み無く急き立てるのだ。

あたしはただ、耳を塞いで蹲り、その暴力に耐え続ける事しか出来なくて。

やがて全てが去った時、雪の下の地面ごと抉り取る様な巨大な破壊の惨禍が残されているのをあたしは見つける。

時間が経てば、そこも降り積もる雪に覆われて。

傍目には他の場所と区別がつかなくなるけれど。

その下に刻まれた疵痕は、ずっと後になっても。

じくじくと、不快な自己主張を始めるんだ。

もし、あの娘が居たら。

あの笑顔で、正しい道を照らしてだして、あたしの手を引いてくれたら。

あたしは。

あたしは…。

…考えるな。

考えるんじゃあ、無い。

あたしは…そんな弱いあたしが、大嫌いで。

自己嫌悪。煩悶。歯を食い縛る。

両手の平を握り締め、爪を食い込ませる。

「…っ」

…皮を破る感覚。ほんの1、2ミリメートルの深さ削っただけなのに、微かな痛みが疾る。

ああ。たったこの程度の事でも、痛みを感じる物なんだね。

それが何故か妙に可笑しくて。

あたしは学校に到着するまでずっと俯いて。

周りに怪訝な目で見られるのにも構わず、けらけらけたけたと嗤っていた。

…どうしても、その衝動を抑えられなかったんだ。

XIII

半ば予想していた事ではあったが、今朝も羽衣の姿を見る事は無かった。
通学路での発作はとうに治まっていて。
今はただ、朝家を出た時以上の虚無感と倦怠感に全身が包まれていた。
だから、羽衣の不在も、驚くほど何の感情も湧かなくて。
あたしは席につくと、前方に顔を向けて、何をするでもなく、じっと座っていた。
午前の授業が始まっても、まんじりともせずにそうしてた。
別にそれに意味が有ったわけじゃ無い。
ただ、姿勢的に前の方を向いてるのが自然だっただけで。
もし、あたしの椅子だけ後ろ向きに置かれていたら、あたしはそれを直そうともせず
一人、皆と180度逆を向いていただろう。
実際、あたしの視界には黑板と何やら口を動かしている教師の姿が見えてはいたけれど。
それは、異世界の人物が異世界の言語を使って、異世界の事を話している様にしか見え
なくて。
当然、何を言っているのか、何を言いたいのか、意味なんてさっぱり分からなくて。
ノートも筆記用具も鞆の中に納めたまま、授業時間も、休憩時間も、あたしは前を向いて
座り続けた。

「…さん、月島さん？」

中年の女が此方に向かって口を動かしている。

何だか気持ち悪い、反射的にそう思って。

ふと、あたしの名前が呼ばれているのだと気がついた。

…不意に周囲の音が戻って来る。

「大丈夫？気分でも悪いの？」眉間に皺を寄せて、そう問いかける女。

確か、ネチネチとした口煩さに定評の有る英語教師だった様な。

怒られてるのかと思ったけど、どうやら体調を心配してるらしい。

…これも、優等生特権と言うものか。こんなのを優等生だなんて可笑しいにも程が有る
けど。

「熱でもあるの？保健室いく？」

熱は知らないが、きぶんがわるい、と言うのは、決して間違っていない。

…保健室なんかじゃ絶対治らないだろうけど。

でも、これも僥倖と言うものかも知れない。

「……すみません。いってきます」あたしは薄く笑むと、平板な声でそう告げて、席を立
った。

後ろ手に扉を閉めて、廊下に出る。

元々方角的に日差しが射し込みにくい廊下は、授業中の静謐さとも合間って少々肌寒いくらいだ。

左手首の文字盤を確認する。

12時、15分。

…4時間目の真っ最中。

もうこんなに、時間が経って居たのか。

瞳を閉じる。

瞼の裏に浮かぶは、藤の花。

羽衣と思い出を作った、楽園の光景。

…やっぱり、そろそろ動かなきゃ駄目だよな。

もしその先に今よりも過酷な現実が待っていたとしても。

…行こう。

開眼、そして首肯。

あたしは保健室とは全く違う方向へと歩き始めた。

これまで授業以外の場で殆ど話した事すら無かった担任の老教師は、あたしの職員室への突発的訪問に驚いた様だったけれど。

あたしの表情を見ると、こんな場所では何だからと、隣の応接室に案内してくれた。

随分衝撃的な内容であるはずの、彼の話。

でも、不思議とショックは無かった。

あたしの心は冷めたままだったけれど。

それでも、これは現実逃避の無感情では無くて、あたし自身の理性による、冷静さ。

もう、あたしはこの道を迷わず進むと決めたから。

「…お話有り難うございました」この場所でこれ以上得られる事は無いと判断し、小さく呟いて席を立つ。

何故か痛ましそうな声で、まだ何か続けようとする教師に、早口で「今日は早退します」とだけ言って。

返事も聞かずに、あたしは背を向けて駆け出した。

XIV

もう授業が終わり、お昼休みになっている教室で手早く荷物を纏めて。
それから事務室である用事を済ませてから。
学校近くのバス停まであたしは、疾る。
傘をさしてるとは言え、雨の中。
スカートに跳ねが散るけれど、そんな瑣末は気にしない。
二日連続で制服汚して、親に怒られるかな。
そんな事を頭の片隅で思うけれど。
漸くバス停に着いて、弾んだ呼吸を整える。
それ程待たずに、バスが来た。いつも乗ってるのとは行き先の違うバス。
先程事務室で書き写した、メモ帳の内容と照らし合わせる。
うん、合ってる。
躊躇無く、あたしは乗り込んだ。

朝よりはましとは言え、交通状況は淀みがちだけど。
あたしはそれに苛立ちを覚えたり、否定的な感情になったりする事は無い。
少なくとも、後退する事は無いのだから。
ほんの少しでも、目的地との距離を詰めて行ったら、今はそれで良い。
深く、シートに座り直す。

孤高に、生きていこうと思っていた。
それで、生きていけると思ってた。
そう、生きて行かなきゃと思っていた。
でも、あたしは自分を囲う樂園の禁忌を犯して。
ある日、果実の味を知った。
あたしはもう、これまでのあたしでは居られない。
誘惑は余りにも強く。追憶は余りにも儂い。
だけど、その甘味に憑かれてしまったから。
もし壁の外へ放逐されたとしても、あたしは後悔なんて、しない。
今立っているのは、あたし自身が決めた路だ。
これから歩むのも、あたし自身が決めた途だ。
それを、貴女にも伝えてあげたいんだよ。
だから、待ってて。
…羽衣。
いつの間にか車の流れは円滑に、バスは見知らぬ景色を走っている。
見覚えの無い街の風景にも、あたしに不安は無い。

「待ってて…」

もう一度、あたしは独りごちた。

XV

四半刻とちょっとして。

やがてバスは郊外の高級住宅地の一角に停まる。

メモと照らし合わせ、間違いの無い事を確認して、降り立つ。

山を切り崩し、大地を犠牲にして人間が作りあげた箱庭。

巨大な敷地を一軒一軒確認しながら歩く。

ほどなくして目的の場所が見つかった。

「姫路」

他の家の物よりも一際高い門扉の脇に、見事な揮毫の表札がかかっている。

流石のあたしでも少し気遅れしたけれど。

一つ、二つ。大きく深呼吸して。

呼び鈴へと手を伸ばした。

どうやら出てきたのは母親のようで、見知らぬ来客に最初戸惑っていた風だったけど。

あたしが恐る恐る名乗ると、「ああ…貴女が」そう、にっこり微笑んで通してくれた。

その微笑みは…見る者の心を解きほぐしてくれる微笑みは、羽衣と本当にそっくりで。

やっぱり親子なんだなって、そう実感した。

…本当言うと、あたしの名前を出して、ああって納得されるなんて、どう言う風に伝わってるのか訊いてみたい気持ちは有ったけれど。

何だか答えを聞くのが怖かったし、来訪の目的はそんな事では無いから…我慢した。

「あの子は今眠っていますけど」長い廊下の果て、あたしをある部屋の前まで案内して。

「お茶を淹れて来ますね」そう言い残して、最後にまた、蕩ける様な素敵な笑みを残して。

彼女は去って行った。

一人残されるあたし。

でも、この扉の向こうに、彼女が居るのだ。

そう思うだけで、こんなにも胸の高鳴りが激しくて。

逸る気持ちを抑えてそっと戸を開けて。

足の長い絨毯地の床へと踏みこむ。

厚地のドレープで閉ざされている為、昼間なのに室内は薄暗かった。

グランドピアノに、レコードの棚、座り心地の良さそうなソファに、大きなテディが数体。

一見雑多な様に見えて、全体的に高い次元で調和が取れた、シックで居心地の良い部屋。

その雰囲気壊してしまわないように、そっと歩く。

部屋の隅。白い天幕が垂れ下がっている。

忍び足で、ゆっくり近づいて行く。

あたしの呼吸や心音が、彼女の眠りを妨げてしまわないだろうか…。

それが心配だった。

後二歩…一歩…。

ほら。もうこんなに近く。

震える手を伸ばして。

細心の注意を払って…繊細なレース地のカーテンを、あたしはめくる。

あたしが恋い焦がれていたひとが、眠っていた。

XVI

…はじめて見る、彼女の寝顔。

パジャマ姿の羽衣は、制服を着ている時よりも更に一回り小さく、弱弱しく、そして…無防備に見えた。

やっぱり頬骨の方とかを見ると、少し痩せたみたいで。

それでもあたしは、それを美しいと思った。

聞き取れない位小さな声で何事か呟いて身をよじる。夢でも見ているのだろうか。

少し寝汗をかいていたので、ハンカチを取り出して、そっと拭う。

ふと。

羽衣が何処か遠くに行ってしまうのではないか、そんな気がして…。

強い不安に押し潰されそうになる。

…抱きしめたい。目の前のこの身体を抱きしめたい。

そうして彼女をこの現し世に繋ぎ止めなきゃ。

衝動が。

でもそんな事をするわけには。彼女の眠りを妨げてしまう。

必死に耐えようとするけれど。

それにも関わらず涙が溢れてきて…。

こんなつもりは無かったのに。

いざ彼女を前にしてみると、あたしの決意なんて、呆気無く崩れ落ちて。

止めたくても止まらない。

だってこんなに…切ない。切ないから。

震える自分の身体をぎゅっと抱いて、あたしは。

…その時だった。

「う…んっ……」

彼女の眼瞼が、蝶の翅の様に何度か震えて。

…そして、ゆっくりと開かれた。

微妙に焦点のあっていない目を彼方此方に彷徨わせてから。

やがて、それがあたしに向くと、細い、少し掠れた声で「…き…つき…ちゃん…?」

あたしの名前を、呼んだ。

…限界、だった。

頬を熱いモノが零れ落ちる。

あたしは寝台に身を投げ出すと、しゃくり上げて、小さな幼子の様に…泣いたのだった。

XVII

「…落ち着いたかなあ？」

「くっ、屈辱だわ…。どうしてあたしが病人に労られる側になってるのよ…」
暫くして。

ベッドに上体を起こして微笑みながら、あたしの髪をぼんぼん撫でる彼女と
その傍らで濡れタオルに顔を埋めて、耳まで真っ赤になってるあたしが居た。

あたしの涙の理由を、羽衣は訊かないでいてくれた。

…もっとも、訊かれた処で説明するつもりも、説明出来る気もしないのだけれど。

今はそれが、凄く有り難くて。

「あははあ。でもお、良いモノが見られたから良かったかなあ」

「う…忘れなさい、と言うか頼むから忘れて下さい」

…いつの間にか立場が逆転しちゃってる気がするのは気のせいだろうか。

いや、最初からそうだったのかも知れないけど。

でも。ああ、そう言えば。彼女と話をしなければいけない事が、あったのだった。

「…それより…聞いたわよ。担任から」…彼女の横顔を見上げ、意を決して口を開く。

「え…あ…ああ…あはは。ばれちゃったかあ…。でも、わざわざここまで来てくれたって事は…そう言う事なんだしね」意外にあっけらかんとして、羽衣は笑った。

「…話、聞かせて貰って…良いかしら？」

「皐月ちゃんになら…良いよ。少し、長くなるかもだけど…ね」穏やかに澄み切った表情。

その裏にどんな感情が込められているのか、あたしには読み取れなかった。

「…わたしのね、心臓は生まれつき欠陥品だったの。難しい病名なんかは、わたしには分かんないけど、お医者様からは、10歳まで生きれば良い方って言われてたみたい」淡々と言葉を紡いでいく羽衣。

「物心ついた時から、周りの人達はそんなわたしに対して、腫物を触るような扱いをしてた。我儘とかは何でも聞いて貰えたり、怒られる事も無かった。みんな、多分善意のつもりだったんだと思う…。だけど、その裏にこの子はすぐ死ぬんだから、って言う考えが透けて見えてて、わたしにとっては唯の苦痛だった」

小学校に上がって暫くして、羽衣は大がかりな手術を受けた。成功率は決して高いとは言えない難しいものだったらしいが、それはひとまずの成功を見せ、少女は10歳の誕生日を迎える事が出来た。

しかし、自分の余命が残り僅かだと言う恐怖に脅える日々は、それでも無くならなかった。10歳になった少女は、今度は15歳まで生きられないだろうと言う宣告を受けていたのだ。

「…でもね。わたしは、皆の期待に反して、15歳の誕生日も、迎えてしまったんだなあ」
けらけらと笑う羽衣。

でも、あたしは一緒に笑う気には、どうしてもなれなかった。

「そ、それで…お医者様は？」急き立てるように、続きを聞く。

「……」沈黙。数秒の事なのか、数分の事なのか。それともほんの一瞬だったのか。
そして「…しらない。」やがて一言だけ返ってきた。

「ある日、気がついたんだ。寿命なんて、誰しも限られてるものだもん。人から教えられるかどうかの違いだけでね。…だったら、そんな不確定な未来に振り回されるよりも、確実に生きてる今この時を楽しく生きようとすれば、その方が良いんじゃないかって。だから…それから何も聞かない事にしたの」

「もちろん、激しい運動とかは無理だし、すぐ何かの拍子にこうやって熱を出しちゃったりするし、お薬だって毎日飲んでるけど…それでも、出来るだけ普通の子みたいに、高校生活、精一杯、輝きたいなって…。今まで出来なかった分も含めて、青春をえんじょしたいって。15になった時、そう思ったのですよ」

出だしから1か月も遅れちゃったけどねー。冗談めかして言う。

「…なんで、教えてくれなかったの」

「だって…そんな事で、気を使わせたりとか、したくなかったから。だから今もね…皐月ちゃんにそんな顔されてるってだけで、凄く、胸が痛いんだよ」羽衣は、まだあたしの髪をなで続けている。

「…莫迦」あたしも大人しく撫でられながら、一言だけ、吐き捨てる。

「うん、わたし、莫迦だもん」

本当に莫迦だ。

…小さな背中で、色んなモノを背負い続けて。

それでも、いつも無邪気で、素直で、マイペースで、世間知らずで、明るくて。

周りに笑顔を振り撒き続けて…。

でも、だからこそ、強い。

「…あたしは、弱いな…」ぼつりと、呟きが漏れた。

あたしは、臆病な人間なんだ。

ずっと自分の弱さを隠す為の甲羅を被って、暖かな日差しからさえも目を背けて、生きてきたんだ。

それを教えてくれたのは、羽衣、貴女なんだよ。

此処に来るまで、あたしがどれだけ苦悩したか、分からないだろうけど。

やっと止まったはずなのに、何故か、また、涙が溢れて。

「やっぱり…今日のあたしは、駄目だね。弱いとこばかりだね…」

「だって」羽衣は笑う。涙でぼやけて良く見えなかったけれど、彼女が笑顔なのは判った。

「皐月ちゃんは、優しい人だもん」

「だって。わたしの為に、泣いてくれてるもん」

「なっ…泣いてなんか居ないわよっ」慌てて眼を擦る。

眼に睫毛が刺さって、悶絶。

よしよし、と羽衣の指先から伝わってくる慰めの感情が情けないやら。恥ずかしいやら。

「そんな顔じゃ説得力ないー」

「…五月蠅いわよ…」

「わたし、今思ったのだけど」

「ヒトはね、皆弱い生き物なんだから。弱い事は悪い事じゃなくて、大事なものは、その弱い部分を、誰かと支え合って、補い合って生きていく事なんだと思う。それはとても、勇気の要る事。だけど、そうする事が出来る相手がいるのって、きっと素敵な事なんだよ。だって、わたし達は“人”なんだもん。」

「わたしも、それがこれまで分かって無かった。…だから、ごめんね。…ごめんね」時折考えこんで、慎重に言葉を選びながら紡ぎ出す羽衣。

…何て、ベタな台詞。

でも、そんな台詞を臆面もなく口に出して、それが様になっているのが、羽衣と言う人間なのだ。

謝らないといけないのは、あたしもだから。

肝心な所でいつも何重にも壁を作ってしまうって…。

だから…これは、お相手様。

でもこれで…あたし達は、今やっと“本当の関係”になれるのかも知れない。

死から目を背けて、明るい物しか見ない様にした少女。

そして一方で。

光の世界が怖くて、自ら作った闇の中へと引き籠った少女。

どちらともなく、頷いて。

お互いの顔を正面から見つめあう。

あたしの瞳の中に羽衣が居て、羽衣の瞳の中に、あたしがいて、瞳の中のあたしは、羽衣を見つめていて。

永遠の合わせ鏡の中に、あたし達が居る。

大きく息を吸い込む。

「あたしは」

「羽衣」

「「じゃあ」」

「「その相手が」」

「「なら良いな」」

「わたしは」

「皐月ちゃん」

…見事にハモった。

無性に可笑しくて、二人で心の底から爆笑する。

…泣いたり、笑ったり、あたし、今多分、凄く酷い顔になっているだろう…。

だけど、羽衣になら見せても良いかな…そう思えたんだ。

XVIII

羽衣が、皐月ちゃんの話も聞きたいなんて言い始めたから、今度はあたしが色々話す番だった。

受験当日に熱出しちゃったこと、それでこの学校に来たこと、意地を張って、周りの人を遠ざけてたこと、そして羽衣と逢ったこと…。

あたしは話が面白い訳では決して無いのに、その一つ一つを羽衣は頷きながら真剣に聞いてくれて…嬉しかった。

特に、お弁当の話題になった時、羽衣は凄く食いついて来た。

「えーっ、今日も作ったのお??本当すごいよお」

「う…うん…いちおう…」…結局お昼を食べずに此方に向かったから、鞆の中に今も入っているはずだけど…。

「見たい見たぁい〜」…どうしよう。羽衣に食べて貰う為に作ったものとは言え、いざお披露目するとなると、かなりの恥ずかしさが…。

結局余りにも羽衣が騒ぐものだから、あたしは観念してお弁当箱を取り出した。

「もう、わくわくするようっ」

「…先に謝っておくわ…期待外れで、御免…」

蓋を開く。羽衣のプロ級の作品に比べると兎戯の様な出来に、この場で穴を掘って潜りたくなる…。

鞆に入れて走ったりしたせいで、ちょっと寄っちゃってるし…。

「……」

何もコメントが無いので、恐る恐る羽衣の方を仰ぎ見る。

ほへーっとした気が抜けた表情で、あたしの作品を眺めてた。

と思うと、いきなり指を伸ばして入っていた竹輪を口に運ぶ。

「ど、どうかなぁ…」怒られた後みたいにしゅんとして聞いたあたしに

「うんっ、おいひいよお」って。満面の笑みで、両手でオッケーサインまで作って肯いてくれた。

「他でもない皐月ちゃんが、わたしの為にわざわざ作ってくれたもの、不味いわけ無いじゃないですかぁ」

「でもあたし羽衣みたく上手くないし見栄えも悪いし…」

「本当に美味しいよお」尚もしよげるあたしに、良く頑張ったねって頭を撫でてくれた。

羽衣はそう言ってくれるけれど。

今度羽衣の体調が良くなったら、色々レシビ教えて貰って、特訓しよう。

密かにそう決心した。

XIX

そんなこんな事をしていたら、もうすっかり夜と言って良い時間になっていた。
いつの間にか、間接照明が数箇所つけられて、やっぱり薄暗い部屋をぼうっと照らしてる。
大きい電気は眩しいから、羽衣の負担になっちゃうのかな。
…名残惜しいけれど、家の人に迷惑にもなるし、羽衣も疲れちゃってるだろうし、そろそろ帰らなきゃ。
そう腰を浮かせたあたしに
「…皐月ちゃん」
羽衣が例に無く硬い、真剣な声で呼び掛けた。
「ちょっと…見て欲しいものがあるの」レイピアの様な、鋭く、金属的で、脆い声色。
「…何、を？」あたしはそれに応ずる様に声のトーンを少し落とす。
「わたしが…姫路羽衣が、今生きてるって証。皐月ちゃんに…見て、触れて欲しいんだ」
「もうちょっとだけ、近くに寄って」
意味を把握しきれないままに、彼女に従う。
「家族やお医者様以外では初めてなんだけど…」
言いながら、羽衣のか細い指が、着ているパジャマのボタンにかかる。
ひとつ、ふたつ、みつつ、よつつ…いつつ。
上から順番に…ゆっくりと外すと、前をそうっとはだけた。
暗い部屋の中でも白く燐光を放つ様に浮かび上がる彼女の素肌。
年齢にしては幾分小振りの…薄い双丘。それを包み込んで護って居るのは清楚な純白の布地。
その中心に沿って。鎖骨の間からみぞおち位まで。薄い桃色の線が一本走っていた。
長さにして10センチメートルちょっと位。
何だかそれは、とても幻想的で。余りにも華奢で繊細で…。
危うい均衡の元にその疵は存在していて。
どうすれば良いのだろうか…。あたしが触れると、壊れてしまうのでは無いだろうか。
あたしの葛藤と狼狽に気付いたのか、羽衣は優しく、あたしの手を取ると…そっと胸元に押し当てた。
嗚呼。
嗚呼、あたしは今、彼女の命に直接触れて居るのか。
儂い…何と言う、儂さか。
でも、生きているのだ。彼女は今、確かにこの瞬間生きているのだ。
押し当てた掌を通して、彼女の熱が、脈打つ鼓動が伝わってくる気がして。
その拍動を…羽衣と言う存在が持つ魂の震えを、全身でもっと強く感じていたくて。
もう片方の手を羽衣の骨張った背中に回すと、あたしは彼女の胸に顔を押し付けた。
羽衣は一瞬、戸惑ったようにびくっとしたけれど、何も言わないまま、あたしの背中に腕

を回して抱きしめてくれた。

暖かい…とても、暖かいよ。

「…綺麗だ」あたしが、囁く。

「……もう、水着とか、着れないけど…ね」あたしの首筋に顔を埋めて、冗談交じりに羽衣が返す。

「…綺麗だ」有無を言わせぬようにまた、囁く。

「綺麗だ…綺麗。」何度も、何度だって繰り返す。凄く…綺麗だ。

「…皐月ちゃん……有り難う…」羽衣が、全身を震わせて…泣いている。

泣きながら有り難うって…。ただ、それだけだったけれど。

それだけしか言えなかったんだと思うけれど、あたしには充分過ぎる位気持ちは伝わったから。

だから…あたしも。

「…羽衣…有り難う…」

生きて居てくれて、有り難う。傍に居てくれて、有り難う。

言葉にならない万感の想いも込めて…有り難うって…。

目の前が何だかまたぼやけてきて…。本日何度目かもう分からない涙が。

雫が頬を伝って、羽衣の傷痕に沿って流れ落ちる。

でもこれは…哀しくて泣いてる涙じゃないのだから…。

くしゃくしゃの顔で、今自分に出来る最高の笑顔を作る。

抱きしめあっていて、お互いの顔を見る事は出来ないけれど。

今きっと、羽衣もあたしと同じ表情をしてるんだって、あたしには分かったから。

Epilogus

卒業式は、拍子抜けする位にあっけ無く終わった。

あたしがこの学校で過ごした3年間で、こんな安っぽい厚紙一枚に集約されてるなんて。でも…明日からあたし達は各々、また新しい環境で、ばらばらになって戦ってゆかなきゃいけない訳で。

…別に感傷に浸ろうと言うのでは無いけれど。ただ…何て言うか…。

「臯月ちゃん～。やっぱりここに居たんだあ。お母さん達、探してたよお」背後からの声に、突然思考が中断される。

わざわざ振り向かなくても、声だけで、いや、此方に向かって駆けて来る足音だけで…分かる。

「…見付かっちゃったか」

藤棚の下。三月中旬に花が咲いてる訳は無く。

寒々しい、何処か淋しい印象を残すけれど。

何となく…最後に、この場所に立ち寄りたくなつたんだ。

「それにしても～。来月から臯月ちゃん、だいがくせーさんだねえ。おとんだあ」

「成人には、未だ早いわよ。…羽衣は浪人生活だけどね」

「ひっどーいっ。でもまあ…あれだけの出席日数なのに、3年間で卒業出来ただけでも感謝しなきゃだねえ」

あっけらかんと笑い飛ばす彼女。

わたしは来月から地元の国立大に。

そして、無謀にもあたしと同じ学部一本で特攻した羽衣は予想通りと言うべきか見事に落ちて、行先無しと言う事に。

もっとも、本人はそれほど気にした様子も無く、来年こそは絶対リベンジを、と意気込んでいるらしい。

…それに付き合って、無報酬で家庭教師やらされる予定のあたしの身にもなって欲しいけど。

いや…それ自体が報酬か、なんて絶対言わない。…恥ずかしいから。

「…風…冷たくない？あたしのマフラー貸してあげようか？」

「大丈夫だよお。まったく、臯月ちゃん過保護さんなんだからあ」

「…良いもん…。…それがあたしの趣味なんだもん…」

「もしかして…臯月ちゃん、拗ねてるのかなあ？か、かわいいよ～」

あたしの顔を覗き込んで、羽衣が笑う。

珠の様に、笑う。

それにつられて、あたしも笑う。

不意に…風が吹く。

羽衣のふわふわの髪も、あたしの長い髪も、頭上の藤の葉も平等に揺らして。

あたし達の笑い声と共に、蒼穹の空へと舞い上がる。

この空の向こう。

背伸びして、手を伸ばしてみても、決して届く事のない空の向こう、遥か彼方。

もしかしたらそこでお気楽に見ているかもしれないカミサマにとっては。

あたし達の存在なんて。

あたし達の生命なんて、たったの68億分の2に過ぎない。

その程度の瑣末でしかない、いつか弾けて消えてしまうライフゲームの駒に過ぎないけれど。

それでも…今隣に居るちっぼけなひとが、この温もりがあたしにとっての全てなんです。

だから。

叶わない願いなのは承知、だけど。

でも…願わくば。

大切な人と過ごす、この掛け替えのない日常が

これからもずっと…ずっと続いていきますように。

少しだけ瞳を閉じて、あたしはそう願った。

応える様に、一際強い風が、また吹いた。

このお話には、何一つ奇跡なんて起きない。

だって

それは既に最初から。

もう既に最初から起こっていたのだから。